

花の歌 歳時記

三が日の頃、決まってこつこつと玄関の戸をつつく音がする。開けると、何もいない。しばらくしてまた同じ音がする。そうっと開けてみてもやはり何もいない。そのうち、その正体は雀である事がわかった。近所の家の戸を同じようにこつこつとついついていたからである。雀は、玄関に飾ったお飾りの稲を食べていたのである。

鳥というものは、つくづく眼がいいのだなあと感じた。アスファルトの上に、粟を撒いてみたことがあった。一時間もすると雀が来て、残さず食べていった。人間の肉眼ではアスファルトの粟は見えなかった。それが鳥には見えるのだ。

子供の眼も鳥とよく似ている。小さな捻子や釘、木の実や光る石。大人が見つけられない宝物を、子供は拾って帰ってくる。今日は水たまりの薄氷を、そうっと両手に包んで子供は帰ってきた。たちまち、手の中で溶けて水になってしまっそうだった。



絵 フクジュソウ / 小柳吉次

寒椿

寒椿という言葉を聞くだけで、きゅっと身体が引き締まる感じがする。一輪だけ、小さな花瓶かびんに活いけてあると、その部屋の空気が違ちがっているようだ。

寒椿というのは、冬に咲き始める冬椿のことをいうだけではなく、寒椿という品種の花

があると植物図鑑に載っている。山茶花さんざんかのよ
うに花びらが散る八重咲きのものである。

寒椿ほとろと散りてなほ紅し記憶のかけ
らを重ぬるやうに

今野寿美「花絆」

「ほとろ」という言葉がいかに椿らしい。

この寒椿は、八重咲きものを詠んでいるの

かもしれない。冬の道が花びらでだんだん紅
く染まって行く。記憶の中の冬へと続くよう
に。

冬深しまだ冬深し寒椿盃のごと手に受け
ており

馬場あき子「ふぶき浜」

椿のあの手に持った感じは、言われてみれ
ば盃さかずきのようである。冬の冷気をなみなみとい
れた花の器である。

くれなるを冬の力として堪へし寒椿みな
花をはりたり

馬場あき子「晩花」

上の句の力強さ。冬の寒さの中に立ってい
る時の、緊張感が伝わってくる。

寒桜、寒菊、寒梅、寒木瓜、寒牡丹。寒の
つく植物は、たくさんある。それは、冬の厳
しい寒さの中に咲く花木を日本人は、愛で、
大切にしてきたからであろう。

かんづばき
寒椿



葉牡丹

葉牡丹は名前の通り、美しい葉を鑑賞するものである。ほんとうの花は五月頃で、黄色い色をしている。

葉牡丹は江戸時代にオランダから入ってきた。キャベツと同種のものなのに、鑑賞用の植物となった。元且になると見事な葉牡丹を飾っている玄関を見かける。不思議とお正月らしいおめでたい感じがする。本当はキャベ



たんぼ
は葉牡丹

ツだったのに。

冷えびえと雲が洗ふ戸の外の明るき占めて葉牡丹はあり

木俣 修高志

葉牡丹の細かな葉の襞の中へ、雲が落ち、それが光の中で、きらきらと輝いているとき、本当に美しい。冬の光がそこだけに、あふれているように見える。

葉牡丹かなにかのように街燈の灯の境目に猫ら坐れる

永田和宏 饗庭

丸くなってじつと猫達が坐っているところを、葉牡丹に似ているといった。影絵を見ているような、かわいらしい感じがする。

いささかのくれない刷ける葉ぼたんの渦のものなかにまきしめらるる

久々湊盈子 熱く神話を

不思議な歌である。読んでいるうちに、葉牡丹の渦の中に坐っているような錯覚をおぼえる。それでいて、どこか、女の哀しさのようなのものが漂っている。

(まえだ・やすこ)

「塔」会員